

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 21 日現在

機関番号：32681

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K02564

研究課題名（和文）ユダヤ系アメリカ文学に於ける身体的可傷性の考察

研究課題名（英文）The Study of the precariousness in Jewish American Literature

研究代表者

相原 優子 (Aihara, Yuko)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：30409396

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：ユダヤ系アメリカ文学作品に見られる「可傷性」のテーマを探った。特に、ソール・ベローの作品やグレース・ペイリーの作品を中心に考察を進めた。このテーマは、特にイスラエルを考察する際重要になる。特に大きな結論はないものの、作品の分析を通して、人間は「力」を行使する力強い存在ではなく、お互い簡単に傷つく弱い存在だからこそ意味のある存在であり、それ故に繋がり得る存在である、という事に気付くことが出来た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

この研究の学術的意義は、多くの場合、文学研究を含む人文系の学問に於いても「戦争」「戦い」を主流のテーマとして考察してきた。むしろ、この分野における考察から一歩進んで、キーワードを「暴力」ではなく、「平和」を新たなテーマとすべき時期が来た、と思われるからである。一人で世界をつかさどる力強い人間の役割というよりも、人間の弱さに焦点を当てる時に到達しているかと思われる。お互いの「可傷性」に気付くことで、「平和」の基礎を作ることに貢献できるのではないかと。

研究成果の概要（英文）：I focused on the issue of the precariousness in Jewish American Literature.

I basically focused on the works by Saul Bellow and Grace Paley. This topic is especially vital when we think about the significance of Israel. There is no large conclusion to this topic, but by analyzing these texts I came to realize that human beings are not powerful beings who use "power," but precarious beings who can be easily hurt and injured. That is the reason human beings are meaningful and valuable and also that is the reason why we can and we should connect."

研究分野：ユダヤ系アメリカ文学

キーワード：ユダヤ系アメリカ文学 ソール・ベロー

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究に先だって、基盤研究(C)「ユダヤ系アメリカ文学に於けるイスラエル表象と平和のレトリック」(課題番号 26370336)に於いて、ユダヤ系アメリカ文学に見るイスラエル表象における平和の可能性について考察を試みた。その際、常に強者や力の強さが議論の中心となっていたが、むしろ、人間共通の基盤あるいは、置かれた状況を考えて時、人間の脆弱さや弱さに焦点を当てるべきだと思った。

(2) ヴァージニア・ウルフがかつて、エッセイの中で述べたように、「病」というものは全ての人間にとって馴染みのあるテーマであるにもかかわらず、文学的テーマとし取り上げられることが少なかった。

(3) 現代思想家のジュディス・バトラー(Judith Butler)の提唱する人間の「はかなさ(preciousness)」の理論や他者論を展開してきたエマニュエル・レヴィナス(Emmanuel Levinas)の思想を用いて、文学作品を分析することに思い至った

2. 研究の目的

- (1) ユダヤ系アメリカ文学作品を新しい視点で読み解き、新しい解釈を可能にすることを目的としたい。
- (2) 戦争など、抗争を巡る言説に対して、別の、新しい視点を加えてみたいと思った。人間の「儚さ」にもっと焦点を当てるべきだと思った。その部分が人間の共通基盤になり得ると考えたからである。
- (3) 男性作家が主流だとされたユダヤ系アメリカ文学には、シンシア・オジックや、グレイス・ペイリーなどの素晴らしい女性作家も多くいる。彼女たちの作品も分析したい。
- (4) ますます環境問題は切迫した問題になりつつある。文学作品を環境から読み解くのも興味深いと思われる。

3. 研究の方法

(1) 原則、文学研究になるため、研究方法の主な部分は作品のテキスト分析になるであろう。多くの場合、本を購入し、その文学テキストを注意深く読み、その文学作品について、自分なりの論文を執筆する。

(2) その分析を援用する様々な資料が必要となるので、それらの資料を購入の後、読む。その作品の思想的背景、歴史的背景、作家個人の略歴、先行研究などを考察する。

4. 研究成果

(1) [著作：共著]

「鉛とシクラメン『学部長の12月(The Dean's December)』(1982)に於ける弱さの考察」(日本ソール・ペロー協会編『彷徨える魂たちの行方』。東京：彩流社、2017、pp23-47

この論は、上述したように、ある様々な事態に巻き込まれる登場人物を「弱さ」の観点から分析したものである。あるものは、社会的システムに従わざるを得ない状況に陥る。あるものは、事件に巻き込まれる。自分でまき起こしたわけではない、様々な暴力的状況に遭遇する登場人物は、弱さを媒介として、人と繋がりあい、不条理なシステムに立ち向かっていく様子を描いている。力を力で制するのではなく、むしろ「弱さ」の中に秘めたる「力」を見つける形で、立ち向かっていく登場人物の姿を描く。興味深いことに、この作品の本筋と大きくは関係のない鉛の公害という環境問題と絡めることで、この問題は独立した問題でありながら、全世界を巻き込む問題であることを表していると言える。論じられることの少ない作品ではあるものの、この作品は、世界規模の問題とそれを如何に人々にリアリティを持って伝えるかというテーマと小説作法を問う、新たな手法を駆使した複雑なソール・ペローの後期の作品である。

「ソール・ペローとグレイス・ペイリー：家を問う女性たち」『ソール・ペローともう一人の作家』(彩流社、2019) 238-258。

主に男性作家主流と言われているユダヤ系アメリカ文学であるが、ここは、代表的なユダヤ系アメリカ作家のソール・ペローのよく読まれている短編「黄色い家を残して(Leaving the Yellow

House)」(1958)を、現代の代表的なユダヤ系アメリカ作家であるグレイス・ペイリーの短編小説「長距離ランナー(The Long-distance Runner)」を比較して、女性登場人物を通して、ユダヤ系文学にみられる「家」の概念を再度問うてみるという論文を執筆した。ペローの短編小説は珍しくユダヤ系ではない。その意図は何であるか探る。一般的に「家」を持つ行為は、褒められた行為ではあるものの、土地をめぐる人々の欲望や闘争には激しいものがある。作品には、多くは書いていないものの、あるディテールを比喩として理解した場合、長くアメリカの歴史にまでさかのぼっている。また、アメリカ文学では扱われることのないイスラエル問題などもふれられる。グレイス・ペイリーの短編小説と比較することにより、ペローの良く読まれてはいるものの、今まで分析されることのなかった「所有」を巡る問題について考察する。

「ミスキャストの謎を追って」『アメリカ文学と映画』(三修社、2019) 258-278。

この論文は、ペローより一世代若く、著名なユダヤ系アメリカ人作家、フィリップ・ロスの原作『ヒューマン・ステイン』とその映画化、いわゆる原作のアダプテーションを論じた論文である。アダプテーション論は、映画化と原作を両方から分析する比較的新しいアプローチであるものの、この手法によって、初めて明らかになるテーマも見つけられる。ロスの作品は、ペローや他のユダヤ系アメリカ作家の作品に比べると性的という誹りを免れなかった。それ故に、映画化しやすかったという面もあるだろうが、そのフィリップ・ロスのトレードマークの性的なニュアンスを帯びた身体性は、後期の作品ではなりをひそめ、むしろ、晩年の彼の著作は、同じ身体でも、生気に満ち溢れた身体よりも、死あるいは「無」に向かう人間の身体というモチーフが色濃くなってきた。アダプテーション論を通して、ロスのテーマやモチーフの変遷を追う。この論文はアメリカ文学学会という学会の学会誌『アメリカ文学研究』第57号の中で、印象に残ったものとして、取り上げられたものである。

「ユダヤ系アメリカ文学：定義を巡る冒険」『深まりゆくアメリカ文学：源流と展開』、竹内理矢、山本洋平編著、(世界の文学をひらく3)、ミネルヴァ書房、2021年、4月1日、32-33、
大学でアメリカ文学を始めて学習する学生に向けて、ユダヤ系アメリカ文学の正確な状況と学習の意義を説明したものになる。ユダヤ系文学は、移民系文学の一種とみなされることも多いし、その理解自体間違っているわけではないものの、一般のマイノリティー文学に比べ、ユダヤ民族の定義も難しいことから、この文学ジャンルの確実な定義が難しいことを説明した。また女性作家の発掘と研究、そして最近発展しつつあるホロコースト文学も重要である。新しくユダヤ系文学を学ぶ学生に分かり易いよう、と同時に最新の研究を踏まえて執筆をおこなった。

「バーナード・マラムッド」、『深まりゆくアメリカ文学：源流と展開』、竹内理矢、山本洋平編著、(世界の文学をひらく3)、ミネルヴァ書房、2021年、4月1日、136-137。

上記同様、ユダヤ系アメリカ文学を始めて学ぶ学生に向けて、ユダヤ系アメリカ作家の代表的な作家バーナード・マラムッドの人生と作品を紹介した。彼の文学に色濃く描かれる一見が弱い登場人物も、負け戦かもしれないと思いつつ最善をつくす態度に、ある種の気高い「勝者」の風格を湛えている様子と彼独特の文体を紹介したいと思い、マラムッドの短編小説「白痴が先だ(“Idiot's First”)」を紹介した。これらの記事の執筆を通して、ユダヤ系作家たちは、「敗者」を好んで描いてきている事が分かる。

(2)【書評】

杉澤伶維子著「フィリップ・ロスとアメリカ」『アメリカ文学研究』第56号2019。

アメリカ文学学会から、没後直ぐ出版されたフィリップ・ロスの論集について、書評を依頼されて、それを受けたものである。よく知られた作家で、何度もノーベル賞の候補に挙げられたと聞く。また、映画化も他のアメリカ文学の作家と決して引けを取らない作家ではあるものの、この作家の日本語による研究書は今までなかったとのことであった。作家のキャリアを思えば、驚くべきことである。それ故に、この研究書は、日本のアメリカ文学研究にとって、また、ユダヤ系アメリカ文学にとって意義深いものであった。多岐にわたったこの作家は、なかなか一言で纏めるのは難しい。内容もさることながら、彼のスタイルにも言及する必要がある。フィリップ・ロスの後期の作品群に焦点を当て、一つ一つの作品を分析していった。書評では、著者の研究者としての緻密かつ正確な分析に敬意を払い、日本のアメリカ文学研究にとっての意義を述べた。

(3)【研究発表】

ワークショップ「今、ソール・ペローを読む面白さとは：もう一人の作家と読んでみる」(日本アメリカ文学学会第58回大会 於：東北学院大学 10月6日)

毎年開催される全国大会の数か月前に、「日本ソール・ペロー協会」の現会長から、お話があり、それを受けたもの。アメリカ文学の全国大会のような大規模な主要学会で、ソール・ペロー

について発表出来ることは意義深い、と思われる。以前執筆した論文「ソール・ペローとグレイス・ペイリー：家を問う女性たち」『ソール・ペローともう一人の作家』を元にワークショップを開くという企画であるとのこと。私を含め、4名のソール・ペロー学者が、それぞれ執筆した論文について、内容を話す。筆者の担当したグレイス・ペイリーの他にペローと、彼のおさな馴染みでありユダヤ系作家の、アイザック・ローゼンバーグ、ユダヤ系作家に数えられてもよい現代作家のポール・オースター、そして日本の作家、遠藤周作を比較してソール・ペローの文学世界を論じた。時間帯的にあまり観客は見込まれないだろうとのことであったが、用意したレジюмеが全てなくなるほど、観客が思いのほか集まった。後に、このアメリカ文学の英語学会の学会誌に英語でこのワークショップについて、紹介された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 相原 優子	4. 巻 56
2. 論文標題 書評 杉澤伶維子著『フィリップ・ロスとアメリカ：後期作品論』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『アメリカ文学研究』	6. 最初と最後の頁 64 70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木元子、坂野明子、大工原ちなみ、相原優子
2. 発表標題 今、ソール・ベローを読む面白さとは：もう一人ほかの作家と一緒に読んでみる
3. 学会等名 日本アメリカ文学会第58回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 竹内理矢、山本洋平編著 執筆者：相原優子、阿部公彦、石原剛、稲垣伸一、上西哲雄、大地真介、岡本和子、小椋道章、折島正司、梶原照子、加藤有佳織、金沢哲、木原義彦、來馬哲平、後藤和彦、柴田元幸、管啓次郎など総勢57名	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 245
3. 書名 『深まりゆくアメリカ文学：源流と展開』（世界の文学をひらく3）	

1. 著者名 ジャック・ライアン、鈴木元子、岡崎浩、山内圭、大工原ちなみ、伊達雅彦、川村亜樹、朴育美、柏原和子、永瀬美智子、相原優子、坂野明子、山本玲奈、佐川和茂	4. 発行年 2019年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 342
3. 書名 ソール・ベローともう一人の作家	

1. 著者名 杉野健太郎、諏訪部浩一、山口和彦、大地真介、川本徹、藤吉清次郎、貞廣真紀、辻和彦、堤千佳子、新井景子、小林久美子、相原直美、中垣恒太郎、山野敬士、大地真介、越智博美、宮本敬子、相原優子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 三修社	5. 総ページ数 359
3. 書名 アメリカ文学と映画	

1. 著者名 鈴木元子、橋本賢二、ジャック・ライアン、三杉圭子、岩崎浩幸、町田哲司、大場昌子、佐川和茂、片淵悦久、伊達雅彦、杉澤玲維子、池田薫子、Gregory Bellow	4. 発行年 2017年
2. 出版社 彩流社	5. 総ページ数 353
3. 書名 彷徨える魂たちの行方	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------